



「モンゴル復興」運動の研究－中華民国期の内モンゴルにおける民族統合とチンギス・ハーン－

田中, 剛

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2008-03-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4385

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004385>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名	田中 剛
博士の専攻分野の名称	博士（学術）
学 位 記 番 号	博い第 748 号
学位授与の 要 件	学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付	平成 20 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

「モンゴル復興」運動の研究－中華民国期の内モンゴルにおける民族統合とチンギス・ハーン－

審 査 委 員

主 査	教 授	森 紀子
	教 授	緒形 康
	教 授	大津留 厚
	教 授	萩原 守

本論の内容は以下のとおりである。

第一章 チンギス・ハン祭祀と日中戦争

日中戦争期の内モンゴルでは、日本の傀儡政権「満洲国」「蒙疆政権」、国民政府地区など各地域が競い合うようにチンギス・ハンの祭祀を行った。本論は、この現象を「チンギス・ハン熱」ととらえ、日中戦争期のチンギス・ハン祭祀が、いかなる契機と過程をへて形成され、展開を遂げたのか、歴史的に跡づけた。

「蒙疆政権」ではチンギス・ハン祭祀が積極的に進められた。それは各地で一律に実施された。漢人地域でも祭祀は実施されるが、失敗に終わる。祭祀の拡大・体系化にあたり、歴史小説『青史演義』の影響は大きかった。その記述は歴史実証性に乏しいものの、内モンゴル東部の詩文、伝承などを取り入れて完成した作品であることから、「蒙疆政権」のモンゴル民族主義は、内モンゴル東部の文化的土壌をもとにしたものだといえる。

オルドスの白八宮は清朝期以来、チンギス・ハン祭祀を行っていたが、全面戦争が勃発すると、祭主の沙王や国民政府は白八宮を日本側から護るため、甘粛に移転させた。その後の白八宮祭祀は国民政府の「国家祭祀」となり、オルドスの人々は国民政府に対して不満を募らせた。延安の共産党では、白八宮の通過を機にチンギス・ハン祭祀がモンゴルの「文化伝統」として「発見」された。傀儡政権、国民政府地区、延安いずれの地域でも、「モンゴル人」ならばチンギス・ハンを祀り、彼の精神に学べ、と喧伝された。裏を返せば、チンギス・ハンを祀ることで「モンゴル人」となったのである。

ただ、この「チンギス・ハン熱」を「創られた伝統」として解釈するだけでは一面的である。白八宮のチンギス・ハン祭祀を貫いていた原理は、チンギス・ハン直系一族の祖先祭祀、大モンゴル国の国家祭祀であった。ところが、祭祀競争がエスカレートすることで、チンギス・ハンの「大衆化」が起こり、従来チンギス・ハンの祭祀と分かち難く結びついていたモンゴル王公や祭祀集団ダルハトの権威は切り崩された。その点で、「チンギス・ハン熱」は、のちに王公制度が廃止される、その精神的基盤を用意していたのである。

第二章 成吉思汗廟の創建

1930年代初にモダンな記念会、「チンギス・ハン記念大会」が北平蒙蔵学校で強行されたとき、すでにモンゴル青年の脳裏にはチンギス・ハンのモニュメントを新造する構想があり、そこでは銅像の設置が語られていた。それが具体的形となって現れてくるのは、「満洲国」においてであった。「満洲国」の対モンゴル政策がモンゴル人に妥協的な政策へと変更になると、チンギス・ハン崇敬追慕の動きが鬱勃として起こるのであった。モンゴル人たちは「チンギス・ハン神社」という語りで「満洲国」の尊孔・閼岳祭祀と同等の扱いを求めたのであり、その点では神道や儒教など祭祀儀礼と宗教を切り離すことによって伝統的価値の再編をめざすという共通した手法を見出すことができる。また、チンギス・ハン祭祀の特権化を求めたことは、「満洲国」の国体まで射程に入れた挑戦であった。

「チンギス・ハン神社」の新造は、日中戦争の勃発によって誕生した「蒙疆政権」の徳王も考えていたことだった。伝統的チンギス・ハン祭祀としての白八宮とは別に新たなモニュメントを創建するという発想は、明治天皇陵と明治神宮という関係を想定していたのかもしれない。また、日本側からも神社建設に同意する意見もあった。神道家の小笠原省三は、海外の神社にはその土地の「始祖および建国功労者」を祀るべきという持論から、チンギス・ハンを祭神に祀ることに積極的だった。さらに、1940年あたりから「満洲国」や華北占領地域で日本民族の卓越性が強調され、「惟神の道」への信奉が強要されてくると、チンギス・ハン崇拜はモンゴル人を国家神道へ接続するために日本側も注目するようになってくる。

戦争の長期化、加えて1941年の独ソ戦開始は、ソ連や外モンゴルと国境を接する内モンゴル地域の政策をモンゴル人にとって妥協的なものへと転換する契機であった。「満洲国」と「蒙疆政権」を超えてモンゴル人を統一するため、成吉思汗廟の造営が決定された。造営にあたっては、献金、労働奉仕というかたちでモンゴル民衆の参加が促された。結果として、このような運動形態がモンゴル人をして精神的アイデンティティの獲得に繋がった。だが、そのアイデンティティが日本側が意図した日本への「同化」に向かうものではなか

った。

成吉思汗廟がもつモンゴル人動員の機能に着目したのが、満洲帝国協和会であった。「兵営国家・満洲国」の建設を目指す協和会は、成吉思汗廟の落成式にあわせてモンゴル青年の戦時動員、軍事教練を敢行した。「神社」から「廟」という名称の変更は、成吉思汗廟が神道神社としては余りにも逸脱したものであったからに違いないが、その機能を見れば日本側はこれを「神社」、しかも明治神宮を意識して作り出したのだった。

第三章 「蒙疆政権」の留学生事業とモンゴル人留学生

日中戦争期、日本が内モンゴルに樹立した傀儡政権、いわゆる「蒙疆政権」の特徴は、政権樹立とその運営にあたり、徳王らモンゴル人の民族運動を利用したところにある。本論は、徳王と日本の「協力関係」を解明する上で、重要な意義を持つ「蒙疆政権」の留学生事業に焦点を当て、その目的、事業計画、実施状況、および歴史的意義を考察した。その結果、以下の点を明らかにした。

第一に、従来の研究で徳王の対日接近は、内蒙古自治運動と国民政府との摩擦が肥大化した結果だと強調されてきたが、実際には運動の開始直後から、徳王は日本の「協力」を求めていた。それは自治運動が、早くから国民政府と省政府の軍事圧力を受けていたからであり、留学生派遣によって軍事を強化し、自治運動の貫徹を目指した。

第二に、日本側にとって留学生派遣の目的は、モンゴル青年を日本に派遣して日本の実力を認識させ、モンゴル人の対日依存心を高めようとするものであった。とはいえ、留学生に許された専攻分野は農牧・教育等に偏り、理科・工学は極端に少なかった。このことは、日本の意図が内モンゴルを原料供給地とするもので、モンゴル人自身の工業開発を認めるものでなかったことを示す。

第三に、モンゴル人にとって留学生事業は、遊牧社会の改造を人材面から支えることが期待された。とくに「蒙疆政権」政務院長の呉鶴齡は、協同組合の設立、農耕の導入、医療機関の整備等をテコに社会を改造し、民衆を自立させようと構想していた。構想実現た

め、呉は北大留学の実施、留学生後援会の創設、予備教育機関の設置など留学生事業の基礎的環境を整備した。彼の構想は、日本の敗戦によって全面展開を前に終わったが、養成された人材は人民共和国成立後に活躍しており、呉の活動を過少に評価することはできない。

第四に、留学帰国者の牧民教育は、先進技術の導入とモンゴル文化の「復興」という融合形態を有していた。女子学校では、畜産、農業等に関する知識・技術が教えられた。また、モンゴル語や音楽、詩歌等の教育にも力を入れ、学生の民族意識を高揚させた。言語教育に中心的役割を果たしたのが、後にモンゴル現代詩の大家となるサイチングであったことは、歴史的に大きな意味を持つ。彼らの教育実践は、これまで少数の政客のものであった民族運動の限界を乗り越え、モンゴル民衆に民族意識を覚醒させ、「民族復興」に向かわせる画期的意義を有していた。

付録 「蒙疆政権」留日学生の聞き取り記録

日中戦争期、中国各地の傀儡政権などから日本に渡った中国人留学生は、1939年当時、既卒者も含めて1万3000人以上いたといわれる（安井三吉「興亜院の中国人在日留学生に関する調査・統計について」、神戸華僑研究会『通迅』第16号、1991年6月）。内モンゴル周辺を支配した傀儡政権、いわゆる「蒙疆政権」も組織的、かつ計画的に留学生を日本へ送り出していた。その理由は、現地のモンゴル側にとって、「蒙疆政権」の留学生事業は、モンゴル復興を担う人材を養成する有効的手段の一つであったからである。1943年時点で日本に滞在する「蒙疆政権」留学生は163人を数えた。帰国後、彼らは日本占領下という限界はありながらも、内モンゴルの社会改良に取り組み、人民共和国成立後もその専門性を発揮した。また、日本敗戦後も内戦などの事情で帰国できなかった留学生たちは、留学生生活をつきながら「満洲国」、南京傀儡政権などから派遣された留学生と連携をはかり、中国留日同学總會を結成した。そして、学校を卒業すると彼らは日本各地の華僑社会で中心的役割を担うのである。以上のように、内モンゴル近現代史のみならず、日本華僑史に重

要な足跡を残してきた彼らにもかかわらず、その経験を記録として残していることは稀で、今回収録した4人の証言は貴重な資料といえよう。

今回の聞き取り調査によって見えてきた「蒙疆政権」の留学生事業の特質は以下のとおり。

第一に、日本へ留学する経緯について。日本への留学を決断する契機として、特にモンゴル人の場合は血縁、地縁を媒介とした人脈が重要な要素であった。例えば、プリントクスはフランスも留学先に考えていたが、「蒙疆政権」政務院長で留学政策の推進者でもあった呉鶴齡との親戚関係が作用して日本留学を選択した。また、サンバラジャブは蒙古高等学院教師のラシズンネが勧めたこともあって留学試験への参加を決意した。なお、プリントクスとサンバラジャブの出身地は当時、「満洲国」の支配下にあった。それにもかかわらず、彼らは「国境」を越えて「蒙疆政権」の留学生事業に身を投じたのである。このことは、モンゴル人による人と情報の移動が日本の設けた「国境線」を越えて内モンゴルの広範囲で展開していたことを示す傍証である。

第二に、日本での留学生活の実態について。「蒙疆政権」の留日学生は、日本側から比較的「優遇」されていたようだ。証言では「特高警察は蒙古の出身の学生に甘く、眼中にない傾向がある」という（席占明証言）。むしろ、「蒙疆政権」の留学生は日本側の強制的指導に抵抗していたようだ。例えば、「蒙疆政権」の留学生は善隣高商での軍事教練を拒否した。「満洲国」の留学生が坊主頭を強制されていたのに対して、「蒙疆政権」の留学生は服装・外出の「自由」を獲得した。また、日本敗戦後も「蒙疆政権」の留学生だけが日本政府から生活費の支給を受けていたという（プリントクス証言）。とはいえ、「蒙疆政権」留学生の「優遇」は、他の傀儡政権の留学生と比較した場合であって、彼らが日本側の厳しい管理下に置かれていたことは間違いない。進学先は留学生の希望が完全に通るわけではなく、日本側によって選択範囲が絞られていた（サンバラジャブ証言ほか）。また、プリントクスは『資本論』を所持していたことを特高警察に探知され、警察署で脅迫を受けたという。

第三に、日本華僑との関連について。日本敗戦は「蒙疆政権」をはじめ「満洲国」、南京傀儡政権、台湾など出身地別の管理体制を解消し、中国人留学生としての連帯を促す契機となった。例えば、盛岡では1945年に中国人留学生100人以上が参加して「国父総理誕生記念日祝賀大会」が開催された（サンバラジャブ証言）。また、北海道大学では新たに中国人

留学生寮を設立して共同生活を始め、雑誌『国境線』で中国人留学生の考えを発信した。

また、北大の留学生の場合、強制連行された中国人とも積極的に接してきたことは重要である。全国レベルでは、日本政府に対して生活救済を訴える過程で留学生たちは連帯し、留日同学總會を結成して発言力を強めていく。こうした活動は学生時代にとどまるものではない。彼らが学校を卒業したとき、同学会での経験と神戸・横浜などの「老華僑」との関係を基に、日本全国各地での華僑總會の設立に尽力するのである。

論文審査の結果の要旨

氏 名	田中 剛
論文題目	「モンゴル復興」運動の研究 ——中華民国期の内モンゴルにおける民族統合とチンギス・ハーン——
要 旨	本論文は、1930～1940年代の内モンゴルにおいて展開された一連のモンゴル民族運動を「民族復興」運動と捉え、その過程でみられた民族統合の試みを、チンギス・ハーンという凝集シンボルに焦点をあてて検討したものである。全体は三章と付録から構成されている。 第一章 チンギス・ハーン祭祀と日中戦争 日中戦争期の内モンゴルでは、「満洲国」「蒙疆政権」「国民政府地区」など各地域が競い合うようにチンギス・ハーンの祭祀を行った。本章では、この現象を「チンギス・ハーン熱」ととらえ、日中戦争期のチンギス・ハーン祭祀が、いかなる契機と過程をへて形成され展開したのかを歴史的に跡づけている。 チンギス・ハーン祭祀は「蒙疆政権」で積極的に進められたが、それには歴史小説『青史演義』の影響が大きかった。これが内モンゴル東部の詩文、伝承などを取り入れた作品であったことから、論者は「蒙疆政権」のモンゴル民族主義を内モンゴル東部の文化的土壌をもとにしたものと推測する。 オルドスの八白宮では清朝期以来、チンギス・ハーン祭祀を行っていたが、全面戦争が勃発すると、祭主の沙王や国民政府は八白宮を日本側から護るため、甘肅に移転させた。その後、八白宮祭祀は国民政府の「国家祭祀」となり、オルドスの人々には不満を募らせた。延安の共産党でも、八白宮の通過を機にチンギス・ハーン祭祀がモンゴルの「文化伝統」として「発見」された。こうして傀儡政権、国民政府地区、延安いずれの地域でも、「モンゴル人」ならばチンギス・ハーンを祀り、彼の精神に学ぶことを喧伝された。すなわち、チンギス・ハーンを祀ることで人々は「モンゴル人」となったのである。 ただ、論者はこの「チンギス・ハーン熱」を「創られた伝統」として解釈するだけでは一面的だとする。そもそも、八白宮のチンギス・ハーン祭祀は、一貫してチンギス・ハーン直系一族の祖先祭祀、大モンゴル国の国家祭祀であった。しかし、各地で祭祀が実施される中、チンギス・ハーンは「大衆化」され、チンギス・ハーンの祭祀と固く結びついていたモンゴル王公や祭祀集団ダルハトの権威が切り崩された。「チンギス・ハーン熱」は、のちに王公制度が廃止されるその精神的基盤を用意したと評価するのである。 第二章 成吉思汗廟の創建 1930年代初頭に「チンギス・ハーン記念大会」を挙行したモンゴル青年は、チンギス・ハーンのモニュメント新造の構想を抱いたが、その実現は「満洲国」においてであった。「満洲国」の対モンゴル政策が妥協政策になると、チンギス・ハーン追慕の動きがまき起こり、モンゴル人は「チンギス・ハーン神社」を「満洲国」の尊孔・閭閻祭祀と同等に扱うよう求めた。この「チンギス・ハーン神社」新造構想は「蒙疆政権」の徳王にもあった。
主査記載氏名・印	森 紀子

伝統的な八白宮とは別にモニュメントを創建する発想は、明治天皇陵と明治神宮との関係を想定したと論者は推測する。また、日本側にも神社建設に同意する意見があった。チンギス・ハーン崇拜はモンゴル人を国家神道へ接続するための方便として注目されたのである。1941年、独ソ戦開始により、日本の対内モンゴル政策は妥協的なものとなる。「満洲国」「蒙疆政権」を超えてモンゴル人を統一するため、成吉思汗廟の造営が決定された。造営にあたっては献金や労働奉仕などモンゴル民衆の参加が促され、結果的にモンゴル人の精神的アイデンティティが獲得されたが、日本側の意図した日本への「同化」に向かうものではなかった、と論者はいう。

第三章 「蒙疆政権」の留学生事業とモンゴル人留学生

いわゆる「蒙疆政権」の特徴は、その樹立と運営にあたり、日本側が徳王らモンゴル人の民族運動を利用したところにある。論者は徳王と日本の「協力関係」を解明するため留学生事業に焦点を当てる。その歴史的意義の考察から以下の四点が結論づけられた。第一に、内蒙古自治運動の開始直後から、徳王は日本の「協力」を求めている。彼の自治運動が国民政府と省政府の軍事圧力を受けていたからであり、留学生派遣による軍事力の強化と自治運動の貫徹が目指された。第二に、日本側にとって留学生派遣の目的はモンゴル人の対日依存を高めることにあり、内モンゴルを原料供給地とする意図から留学生の専攻分野は限定された。第三に、「蒙疆政権」の留学生事業を積極的に推進したのは、政務院長の呉鶴齡である。彼は協同組合の設立、農耕の導入、医療機関の整備など、社会改造とモンゴル民衆の自立を構想し、留学生事業によって遊牧社会の改造を人材面から支えることを期待した。彼の構想は、日本の敗戦によって全面展開できずに終わったが、養成された人材は人民共和国成立後に活躍しており、呉の活動を過少評価することはできない。第四に、留学帰国者の牧民教育は、畜産・農業の先進技術の導入とモンゴル文化の「復興」を融合させたものであった。彼らの実践は、これまで少数の政客のものであった民族運動の限界を乗り越え、モンゴル民衆に民族意識を覚醒させ、「民族復興」に向かわせる画期的意義を有していた。

総じて本論文には躍動的な示唆に富む視点や素材が数多く内包されている。ただ、その表現に親切さが欠けるため、素材の魅力が伝わり切れていない恨みが残った。とりわけ、一、二章と三章のつながりが弱いことは審査委員が共通して指摘するところであった。今後著作としてまとめる際にはよりことばを捕捉して説得性を高めることを当人も課題とした。付録された聞き取り資料も興味深いものがあり、今後の活用が期待される。

以上のような審査結果に鑑み、本審査委員会は、論文提出者田中剛が博士（学術）の学位を授与されるに足るものとの結論で一致した。

審査委員

区分	職 名	氏 名	区分	職 名	氏 名
主 査	教授	森 紀子	副 査	教授	緒形 康 印
副 査	教授	萩原 守	副 査	教授	大津留 厚